

## ～旧約聖書を読んで感じること～ (86) 温厚な、奇跡の預言者 エリシャ

エリヤはバアル信仰から抜け出せないイスラエルに、新たに道備えをするように使命を与えられました。神はなかなか希望を持ちえないエリヤに、「しかし、わたしはイスラエルに七千人を残す。これは皆、バアルにひざまずかず、これに口づけしなかったものである。」(列上19:18)という約束の言葉を告げてエリヤを励ました。



エリシャ Abraham van Dijck (1655)

エリヤはアベル・メホラのシャフトの子、エリシャ(850-800BC)を後継者に選ぶようにと告げられました。アベル・メホラはヨルダン川流域の肥沃な場所にあります。エリシャはそこで、非常に裕福な、農業者として、穏やかに過ごしていました。エリヤとは対照的で、温厚で、冷静で、自然には詳しい知識のある人物のようです。

エリヤは自分の命が尽きることが分かった時、エリシャから離れて、一人旅立とうとしましたが、エリシャは「私はあなたを離れません」とエリヤに忠実で、尊敬と愛情にあふれて答えます。エリヤはエリシャの望みを叶えてあげたいと言いますと、エリシャは「あなたの霊の二つの分をわたしに受け継がせて下さい」(列下2:9)と願いました。エリヤは自分を見送れば叶えられると告げ、竜巻と共に天に上って行きました。

エリシャは一人取り残されましたが、手元にエリヤの外套が落ちてきました。エリヤがしたように、外套で水を打つと、ヨルダン川の水が左右に分かれました。エリシャはエリヤが自分になすべきことを託したのだと信じる事が出来ました。エリヤの霊を受けて、エリヤとの別れをしっかりと受け止めました。それを見ていたエリコの預言者たちも、エリシャをエリヤの後継者として、慕うようになりました。エリコで水を清める奇跡(列下2:19-22)を行い、若いエリシャは預言者として生きることを決断しました。

若いエリシャは清々しい気持ちで、アブラハムの時代からの伝統ある信仰の町、ベテルへ向かって行こうとした時、言いようのない事件が起きました。それは町の小さい子供たちが「禿げ頭、上って行け、禿げ頭、上って行け」(列下2:23)と嘲笑したことにエリシャは我慢ならず、子供たちを睨み付け、呪ったのです。子ども達のうちの42人が2頭の熊に引き裂かれたと記されています。老人になれば誰でも禿げますが、エリシャは若くして禿げていたのでしょうか。若い男性としてプライドが傷つけられたのです。それ以上に、たとえ小さな子供でも、人の外面的な姿、形を嘲ることは許されない、ましてや神に仕える預言者を嘲笑することへの神の裁きが教訓のように記されているのでしょうか。苦しい経験でしたが、エリシャはベテル、カルメル山と巡礼をして、都サマリアに帰りました。

やがて都サマリアは今度はモアブに攻められました。エリヤの弟子ということで、一目置かれていたエリシャは、ユダの王ヨシャファトから信頼され、アハズヤの後を継いだヨラム王、また、同盟を組んだエドムの王に懇願されて、この戦いのために預言をすることになりました。

この時、部隊の水は底を尽き、自滅寸前でした。その時、エリシャはなんと、「楽を奏する者を連れて来なさい」(列下3:15)と命じます。楽は喜びの時の道具でしたが、エリシャは一同と共に、奏楽を聞いた後に、「涸れ谷に堀を掘れ」と預言しました。すると堀に水が流れ込みました。さらに、堀の水が一杯になり、朝日を浴びて、血のように見えました。モアブはイスラエルが同土討ちをしたものと思い、この時とばかり突入してきましたが、待ち構えていたイスラエルに逆に討たれてしまいました。

この一件以来、エリシャは政治に関する深い洞察力をもって、王に助言、警告を与え、平和をイスラエルにもたらしているのです。エリシャは預言者として、貧しい人々に、食べ物を与える奇跡を行うことに真剣でした。農園主の息子として働いていた経験が役立ったでしょう。また、国全体の食糧事情、経済にも目が届き、その観点からも、冷静に助言しています。また、王であれ、貧民であれ、異国の人であれ、病気になれば助けています。貧しい民、裕福な人、王宮の人、高官、さらに捕虜となった敵にも、分け隔てなく親切に接しています。エリシャの行為に感謝し、謝礼を差し出そうとも、受け取ろうとしていません。むしろ、下僕が謝礼を受け取った事に対して怒っているほどです。

最後に、エリヤから託されたように、不信仰な王に代えて、イエフを見出し、彼に油を注ぎました。